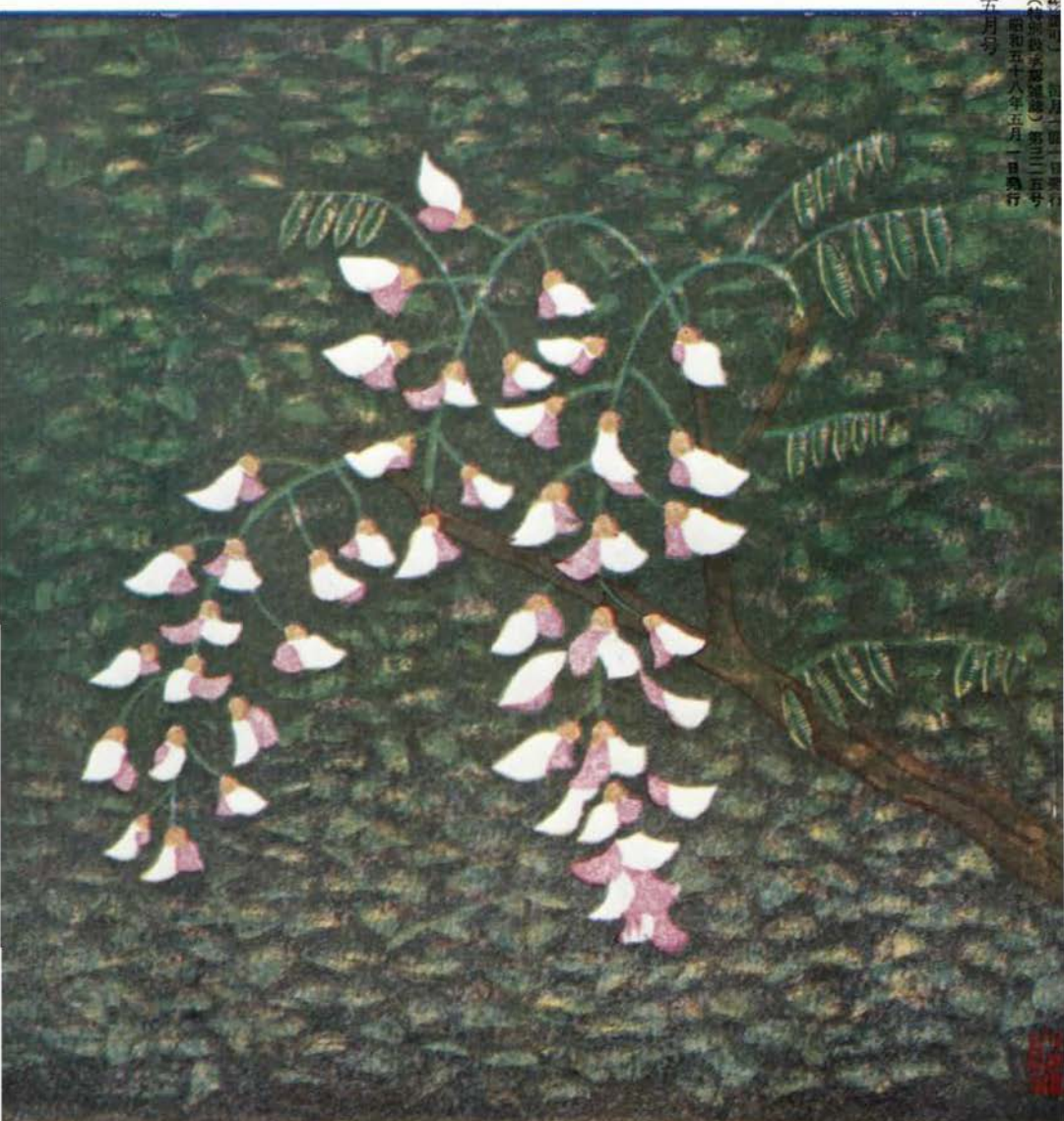


浄土

1983-5

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 五月二日
昭和二十四年四月二十八日 渡輪堂 (株) 設 東京 第三二五号
昭和五十八年四月二十五日印刷 昭和五十八年五月一日発行
第四十九卷 五月号





花のいのち

散る桜 残る桜も 散る桜

「花のいのちは短かくて」といわれた桜の花が散ると、すべての樹木にみずみずしい生命を感じる、若葉の匂うような季節がおとずれる。この季節は小さな新芽にも、一輪の花にも、微細な虫けらにも、大地はあらゆる動植物にいのちを与えている感を深くする。

そんなとき、「地藏」という言葉を思い出す。「地藏」という名前の起りは、地は万物を生ずるものであって、種子をまけば成長して、花を咲かせ、葉を繁げらせ、実を結ばすように、大地は偉大な効力を蔵しているというのである。同じように、この地藏菩薩は、すべての衆生を救済する偉大な効力を蔵すること、大地のようであるところから、その名が起ったといわれる。

もののいのちには、寿命があり、かぎられたいのちがある。短かい花のいのちも、散り去って大地に還るとき、それは無に帰するのではなく、新しい生命を生み出すための肥料となつて働きをするのである。

いまはなき、かけがえのない愛児のいのちも、地藏菩薩は、かならず救いとして、新しいいのちを未来永劫に生み出すために働いているのである。

(宮林昭彦)

五月号



我れ無量劫に於て、大施主となつて
あまねく諸の貧苦を濟わずんば、誓
つて正覚成ぜじ。

——『無量寿經』四誓偈

目 次

法 話

独り言……………守 中 裕 幸……(2)

〈ずいそう〉 裁断橋をたずねて……………坂 野 泰 巨……(7)

観音勢至の両菩薩と勢至の応現……………中 林 俊 雄……(19)

(一) (口) (法) (話)

法然上人の対機説法……………村 瀬 秀 雄……(12)

特別寄稿

「ウエサカ」讃仰……………宇佐美 諦 練……(14)

〈読者のページ〉

藤井実応ご門主の思い出……………築 地 泰 賢……(26)

四 國 行 軍 日 記

五月の行事……………鷺 見 定 信……(30)

浄土句集……………一 田 牛 畝 選……(24)

〈表紙裏・巻頭言〉 花のいのち……………宮 林 昭 彦

念仏ひじり三国志 (108) ——法然をめぐる人々…寺 内 大 吉……(37)

表紙 大西耕三画

カット 大正大学美術部

法
話

独
り
言



つい先頃ある若い人々の集りに同席した時、一人の先輩がその挨拶の中で次のような話をされたのであるが、その節、近頃などか同じような言葉を聞いたり読んだりしたことがあるなど、ふと気がつき、同時に心に鋭く刺さるような感覚をもったので、他の人はどう思われるかと考えて、敢て以下の拙文を綴った次第である。さて、その表現であるが……、

守もり 中なか 裕ゆう 幸こう

(東京・原町専念寺住職)

「……今日この頃はど人心の荒廃して居る時代はないよう思われる……元祖が世に念仏をすめられ始めた時も又このような世情であったのであろうか……であるから君達若人の真剣な活動が今こそ大いに期待され……」というような趣意であった。

若者達への激励の言葉としては何等首尾矛盾もなく、何気なく聞けば特に批難の余地の

ない挨拶として受けとめられるものであったが、思い返すと、今はそんなに悪い時代なのか。表現の誇張が人々のあたりまえの習慣になってしまったのではないかと、いささか問題を含んでいるなという気になった。そして冒頭にものべた通り、「人心の荒廃」とか、或はそれに似た表現が、ショッキングな事件の報道の度に新聞紙上に現れていたことを思い出したのである。

「本当に今ほど人心が荒廃している時代はない」のかと、私は自問自答した。

その朝はひどい雨で、帰路のことを考えているうちに結論が出せぬままその席を立ったが、車中ずっと、標語のように人々に慣用される、「人心の荒廃」ということの具体的内容がどんなものか種々想像してみた。

三十年前の世情はどうであったか、三十年前の世情を造り出した昭和初期はどうで、大正の時代は今とは全く違って素晴らしい時代であったのだろうか。

社会時評的用語の「人心の荒廃」を、一番初めに誰が使いはじめたのか知らないが、随分昔から聞いていたように思うし、今となっては「荒廃」という語を聞いて、その内容としての具体的な事実が、果たして「人心の荒廃」による結果なのか、もっと異なる素因によって現れた事実なのか、確かめる術もない。

屢々、事柄の一面を把えて、一見まとまりの良い術語が、多くの人々によって選択され世に出され流布するのであるが、やがて多くの人が、或る時は警告や教訓として至極安直に、更に進めていえば頗る無責任にこれを使うことになる。発言した自身は、その「荒廃」の事実、具体的な対応を行動として示すことなしに社会時評的に発言して終っているのが日常的風景であり、私も自分自身同列にあると改めて慚愧にたえない。

確かにこの三十数年の間、「人心の荒廃」と表現してもよい事件や情況が目立つて来たような気がしないでもない。しかしこれとても、

その事柄を報道する組織や手段の規模がおそろしい程に発達したことによって、ほとんどの事件が人々の目や耳に即座に届く結果となり、それだけ過ぎ去った時代よりも著しく目立つと言うことでもあり、人間性の根本にある愚かさに起因する行為や、その行為の集積から誘発された諸々の事件は、今日現在と同じように、過ぎ去った時代にも在ったと思われる。

我々には教訓や警告に総括的な「標語」を選んでこれを掲げること、すぐに安心してしまふという妙な悪癖がある。「明るい社会」とか「平和」とか「福祉」とか「文化」とか「人命の尊重」とか、いくつでもあるが、それぞれの内容について明確な認識なしに題目を唱えるばかりでは、問題の進展は少しもないことは一寸考えれば誰にでもわかる筈なのに、まずは唱題、そしてそれが問題解決に重要な役割を果たすとみなす悪い傾向が、現在の我々をとりまく社会環境にあることは憂慮す

べきことである。

「人心の荒廃」という言葉が具体的内容として多発する惨忍な殺傷、暴力行為、性的犯罪、強盗等という人間社会の必然的ともいふべき暗部の中で、特に最近の頻発する尊属殺傷、校内暴力、少年非行等一連の犯罪的行為の流行現象に関連して使われていると思われるが、これらの事態の深層の原因について、正しい解析が行われなければ目的に叶う対策は到底立てられぬことになる。

意地悪い言い方だが、総体的に言えば今ほど良い時代はないのではないかともいえる。たとえば私達の少年時代には、公道上で大人がなぐり合う喧嘩は日常茶飯時であったし、酔漢の醜態はこれまた毎晩のようでもあったし、社会的差別は目をそむけたくなる程であった。

今ここで、ことごとしく「人心の荒廃」という語のみをとりあげた真意は、事の本質をよくみきわめ、「標語」を掲げる場合には、

その内容をも併せて示す習慣をつける必要があるであろうことである。

わかりきったようなことを事あたらしく言うのは元祖の教えに導かれる我々の行動の基盤である念仏行にしても、口うつしの空念仏では社会に対する責務は果せない、とかく少庵の住持としては、ひそかに自身の安堵のためにのみ念仏をとなえて過ごしがちであることへの一つの自戒のためである。

ともあれいくつかの対処せねばならぬ問題が存在する以上、何とか踏み出さねばならぬことは明白である。わが教団も今までは、特にこれらの事態に対処するため専門の部会を設け、宗団としての原則や方法を討議した経験がない。しかし所属の一員としては、日々一連の異常な社会現象に多かれ少かれ直接に関与せざるを得ない状況にあるが、実際はどのように動けば社会的責務を果たし得るのか、全く個人として自信なげに行動しているわけで、事態に対処する強力な指針を、宗団

としても、合議・公表すべきであると提言したい。

社会を意図的に形成して行く近代政治経済社会の基本倫理の確立を怠って来たために、今、教育割当(学校の、家庭の、社会の)の社会組織、一般社会の倫理に重大な粗漏な欠損部分が生じつつあることは明白である。

とかく我々は、教育を受ければ受けるほど抽象的に、唱題的に、先祖の教義を説くことに終始しがちである。しかし、その原理に基いて、我々がその資質や職分に応じて、誰よりもすばやく社会の異常事態に対処してゆくような姿勢を打出すことが、宗団という組織を形造っていることの一つの使命でもあると私は考える。

人間は言葉を自らのものとした時に今日の社会を築く土台を造り出し、その獣性を脱却し人間となり、地球上の覇者を僭称するに至ったのであるが、その言語の便利さの故に、学校教育に於ても、抽象的な概念語が横行し

言葉の具体的内容がその語を見、聞きするだけでは理解出来ないのに、その語だけが氾濫しているため、言語記号を記憶するだけが教育効果の最終目標になつてしまっている。私はこのことこそ今日の社会の異常現象の重要な原因であると思っている。

人心に「荒唐」ありとすれば、その具体的な事実とそれによって来る経過を追及することをはじめるべきであつて、我にもまたその仕事の一端を荷い得る職分にあるを思う。

国家社会が成り立っていることが個人の存在を防護しているわけであるから、その中人々は、相手の、隣人の存在を当然容認する原則に立たなければならぬ。愛も信頼も慈悲も感謝も知足も六善趣も、その他すべて戒といわれるものも当然倫理の根本として、家庭でも学校でも社会でも、幼時期から日常行動の訓練の中で充実して行かなければならないのである。しかし、知識が言語記号だけに限り、語の意味は他の語の置き替えによって理

解し終ったとする現状は、愛が慈悲が、どのような場合どのような行動によって実現した時に、それが愛といい、慈悲となるのかということを繰り返し具体的に教えることが教育の根本となるべきであらう。

このように考えて来ると、現状の教育に対し、制度内容共に、我が宗団としても、積極的な要請を当局に対し提言されてよいのではないかと思うのである。

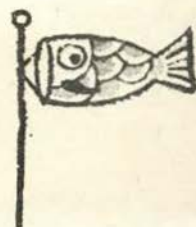
物凄い速度で変転する社会を、進歩と受けとめるか、単なる展開と考えるかは、人各々の立場によって異なるが、明るい恒常的な平和が永遠に続くなど誰も考えはしない厳然たる事実に対峙する時、三十数年の教職の現役を退いた今、人生薄暮どころか宵闇の中、周囲を識別しがたき域に達し、余生の里程だけは明白に予測出来る今日であるが、幸いに周辺の若い同行の励ましもあり、共にひそかな決意をもって歩もうと考えている。

(ず) (い) (そ) (う)

裁断橋をたずねて

坂^{さか}野^の泰^{たい}巨^{きょ}

(茅ヶ崎市西運寺住職)



ぜひたずねてみたいと念じていた。

昨年さくねんの春のこと、私は寺務ていむの合あい間まをみて、早朝さうしやうの新幹線しんかんせんにとび乗った。

名古屋駅なごやえきでタクシーに乗り、運転手うんてんてに、

「熱田区ねつだくの伝馬町でんばまちにある裁断橋さいだんきやうのところへ行きたいが…

…」

とたずねると、

「行ったことはないが、だいたい見当みあたがつかますよ」と言いって走はしってくれた。

おのれ生なきている間は
子の身みに代からんことを念ねんい
おのれ死しに去さりて後のちには
子の身みを護まもらんことを願ねがう

——「父母恩重經」——

名古屋なごやの熱田ねつだにある裁断橋さいだんきやうの由来ゆゑと青銅せいどうの擬宝珠ぎぼうしゆに刻きまれた銘文めいぶんについては、たいへん興味きふみがあり、以前いぜんから

運転手の話によると、

「旧東海道のところは精進川という川が流れていて、そこに架っていたのが裁断橋だですよ。今は、精進川は埋め立てられてしまい、橋はその近くに保存されていると聞いています」

と親切に教えてくれた。

その辺りは、国道一号線と国道十九号線との交差したところで、東海道線や名鉄もその一号線を横切っており、近くには地下鉄の駅もあり、交通機関の入り組んだ地域である。

旧東海道の下を流れていたという精進川の跡を見せてもらい、そのすぐ近くの道路わきに「裁断橋址」という白御影の石柱が立っていたので、たやすくさがしあてることができた。

そこには、精進川を模した池があり、橋がわたされていた。これが裁断橋なのだ。この橋は、もとの三分の一に縮小したものだそうである。

橋の石柱には擬宝珠が四カ所にはめこまれている。この青銅の擬宝珠は腐食を心配してか、透明のプラスチック

クでしっかりととおおいかぶされ、さらにステンレスの枠で保護されている。

裁断橋を渡ると、正面に小さなお堂がある。私は、はやる気持を押えて、まずお堂の前に立ち、持参のお線香をご供養した。

このお堂は姥堂（うばどう）とのことだが、左脇壇のところに若武者の掛軸がさがり、その前に「金助とその母の霊位」という黒塗りの位牌がまつられている。

さて、四つの擬宝珠のうち、三つは漢文で刻まれているが、もう一つの擬宝珠には、子を憶う老母の銘文が平仮名文一四五の文字となって刻みこまれているのである。

てんしやう十八ねん二月

十八日をたわらへの

御ちんほりをきん助と

申十八になりたる子を

たゝせてより又ふため

とも見さるかなしさの

てんしやう十八ねん二月
 十八日丹をたなうの
 ちんちやうをきん助と
 や十八母よりくるを
 たせてより又やめ
 とを思さるぢやう
 あまりいすこれに
 候は事なるの
 力をはらくふいと
 ちんちやうをきんしやう
 ふつし給へ
 とうんせゝあんとは
 乃ち又ちんちやうを
 ちんちやうをきん人ハ
 念仏申給へや卅三
 年ぬくやう也

(天正) 年
 てんしやう十八ねん二月
 十八日にをたはらへの
 (小田原) 御ちんちやうをきん助と
 (陣) 申十八になりたる子を
 (立た) たせてより又ふため
 (二目) とも見ざるかなしさの
 (念) あまりにいまこのはし
 (念) をかける成 はくの
 (落) 身にはらくふいと
 (即身成) もなりそくしんしやう
 (仏) ふつし給へ
 (逸岩世俊) (のち) 世俊
 (世) いつかんせいしゆんと後
 (世) のよの又のちまで 此
 (書) かきつけを見る人は
 (し) 念仏申給へや卅三
 (供養) 年のくやう也

あまりにいまこのはし
 をかける成 はくの
 身にはらくふいと
 もなりそくしんしやう
 ふつし給へ
 いつかんせいしゆんと後
 のよの又のちまで此
 かきつけを見る人は
 念仏申給へや卅三
 年のくやう也

「天正十八年二月十八日に、小田原への御陣、堀尾金助と申す十八になりたる子を立たせてより、又ふた目とも見ざる悲しさのあまりに、今この橋をかけるなり、母の身には落涙ともなり、即身成仏したまえ、逸岩世俊禪定門(金助の法名)と、後の世の又のちまで、この書きつけを見る人は、念仏申したまえや、三十三年の供養なり」

この文章は、「成尋阿闍梨母集」の老母の手紙、「ジ

「ヤガタラ文」のお春の消息と共に、わが国の女性による三大名文の一つと称されているものである。

天正十八年（一五九〇）といえば、豊臣秀吉が三月一日に京都を出発して東海道を下り、北条氏政を攻めたときである。

それより少し前の二月十八日には、堀尾金助という十八歳の若武者も、この橋のたもとで母の見送りをえて小田原の役に出陣したのである。

ところが、漢文の擬宝珠にも刻まれているように、金助は六月十八日には戦地で病死し、帰らざる人となってしまった。

七月になってから戦いは終り、戦友の横井源助という人が、金助の遺骨と遺具を母のもとに届け、最後臨終の様子を話したと言う。

金助の母は、悲嘆のどん底に落されたわけであるが、その翌年には、一人息子との最後の別れの場所となった精進川の橋が老朽化していることに気づき、金助の菩提を弔うために、費用を投げ出して、橋の修理をしたのである。

それから、毎日のように橋のたもとに立っては、わが子が帰ってくるような気がして待っていたらしい。

十年、二十年と経ち、金助の三十三回忌を明年にひかえた元和七年（一六二二）に、老母は莫大な費用を捻出して、二回目の架橋工事を決意した。

周囲の人たちのすすめで、擬宝珠に刻む文章も書きあげ、悲願であった橋の竣工を間近かにして、老母は七十七歳の生涯をとりしまったのである。

「又ふた目とも見ざる悲しさのあまりに、この橋をかけるなり、

母の身には落涙ともなり、即身成仏したまえ、逸岩世俊と後の世の又のちまで、この書きつけをみる人は、念仏申したまえや、三十三年の供養なり」

と読めば読むほど、老母の切々なる情愛がこの擬宝珠に深く刻みこまれていることがわかる。

元和八年（一六二二）六月、金助の三十三回忌に橋供養をして以来、今日まで三百六十有余年の間、この老母の銘文がどれだけ多数の人に読まれ、語りつがれてきたことであろうか。そして、その人たちが涙して称えてくれたお念仏も、今日まで数えきれない人たちに受けつがれ

てきたのである。

裁断橋は、今、姥堂のところにあるが、堂内には昔、木彫りの大きな奪衣婆（だつえはば）がまつられていたと、地元の人が話してくれた。

ある本に、奪衣婆のことが次のように記されている。
「三塗の川を渡ると、鬼の姿をしたばとじが待っていた。」

「さあ、ここからは裸になって行け！」

ばばは、トラのように叫んで、わしらの着物をはぎとった。じじは、それをうけとって大きな木の枝にかけた。

「これをしろ！ 枝がこんなに曲っているぞ。お前は悪いことをした証拠だ」

そういつて、じじが、わしをにらんだ

このような苦しみをえて、亡き人は、次にエンマ大王の所へ連れて行かれ、裁きをうけるのだそうである。

地元の資料によると、裁断橋は三塗橋ともいわれ、精進川は生死の川とも三塗の川ともいわれたようである。この橋を架けるということは、此の岸から彼の岸に到る

という意味があったのかも知れない。

さらに、姥堂の先には熱田神宮があるが、その本地はエンマ大王の宮であるともいわれている。

姥堂には、私のいる間にも、裁断橋を渡って何人かの参詣者があった。おのれの死後、三塗の川を無事に渡してもらえるように、奪衣婆におすがりしているのかも知れない。

裁断橋の銘には、金助の母の名前はどこにも刻まれていない。

坂村真民さんの詩に「母という字」というのがある。

ちかごろ母という字を／ずいぶん書くが／こんなに
難しいとは／全く知らなかった／百書いて／ああい
い字が／書けたと思うのは／ほんの僅かである／こ
れと同じように／母の労苦を知ること／また難し
い

母の労苦とは、すべて子供のためのものである。自分の生きている間も、死に去りて後も、子の身の無事だけを念願しているのが「母」なのである。



(一) (口) (法) (話)

法然上人の対機說法

むら せ ひて お
村 瀬 秀 雄

河内の国(大阪府)に天野の四郎という強盜の首領がいて、人を殺したり財宝を盗むことを世渡りの仕事としていたが、年老いてから法然上人の教えに帰依し、出家して教阿弥陀仏と名乗った。いつも上人の側に仕えて教えを受けていたが、やがて相模の国(神奈川県)の河村にいる知り合いを頼って関東に下ることになった。教阿は最後の教えを受けに上人を訪ねたが、上人は人前を飾る心をなくして真実の心で念仏を唱えねばならないと教えた。そしていった。

「朝でも昼でも夕暮れでも人に聞かれる心配がない所を選んで、いつも人目を飾らずに念仏を唱えるのである。要するに必ず極楽往生したいと願う本当の念仏を唱えるために人目を飾らない心情は、たとえば盗人の気持に似ている。盗人は他人の財産が欲しくなり、心の底では盗みたいと深く思っている、表面はさりげなく振舞って、決して怪しい様子を人に見せないように苦労している。この盗みたい気持は誰も知らないから、これも少しも飾らぬ心である。必ず往生したいと願う心もこれと同じことである。人がいかに多く集っている、人々に念仏行者である様子を見せずに心の中で忘れずに往生を願

っていればよいのである。こうして唱える念仏はみ仏だけが聞き給うているのであって、その外には誰も知っているわけがない。仏さえ知り給うている念仏ならば、必ず往生できることに疑いがない」

教阿は上人の教えを聞いて心から喜び、踊りたいような気持で合掌し、上人を礼拝してから退出して行った。後になって法蓮房信空が上人の前で教阿の話をして、そのようなことがあったのかと尋ねた。すると上人は思い出したようにしていった。

「いやそのことであるが、教阿は以前に強盗の首領であったと聞いていたので、対機説法として盗人を例にとつて話したのである。たしかに納得できた様子であった」

教阿は知人を頼って河村に行つて暮していたが、やがて病氣になつて臨終を迎えた。その時少しも心を乱すことなく合掌して、高声念仏を数十遍唱えながら静かに息を引きとつた。上人はこの話を聞いていった。

「教阿は念仏の教えをよく心得たように思っていたが、やはり間違ひではなかった。まことに立派な往生であった」

対機説法のことを応病与薬ともいうが、これは医師が

病人の容体に応じた適切な薬を調合して与えることに喩えたものである。医師ならば四百四病の病状に対応して、最も効果がある投薬を行うのである。しかしどのような人に対しても適切な説法をすることは、まことに難しいといわなくてはならない。恐らく上人は盗人の心までも知っていたから、教阿に判り易く教えたのであろう。上人は難行道聖道門しかなかった時代に初めて易行道浄土門を開き、しかも念仏の教えを瞬く間に全国に渗透させたのである。これは浄土宗の教えが庶民に判り易かったばかりでなく、上人が学僧であつてしかも庶民の心の表裏に通じていたからである。あるいは聖光房弁長に三重の念仏を詳しく説き、あるいは室の泊の遊女を教化したようなものである。いつも相手の身になつて教えを説いた上人は、いつも対機説法であつたのである。例えば百四十五箇条問答をみると、人々がよくもあのような細かなことまで質問したものであると感心させられる。このように人々が心安く、少しのためらいもなく相談できたのは、法然上人の人徳に違ひないが、いつでも誰にでも懇切丁寧にして適切な教えで説法していたからであると思うのである。

特別寄稿

「ウエサカ」讃仰



宇佐美 諦練

(名古屋市遍照院住職)

本年も五月を迎え、「ウエサカ」祭の月となった。

「ウエサカ」は御承知の如く、釈尊の生誕と成道と涅槃が共に五月の満月の日であるとして、東南アジア仏教国にて盛大に御祝いする聖日である。本年は満月が五月二十七日である。

愛知県でも昭和二十六年より「ウエサカ」讃仰を実施

して、県下仏教系の学園を主に、県、市仏教会が協賛、県下の大寺院が後援し毎年各学園が当番で式典を挙行し、又寛王山仏骨奉安塔前にて法要を厳修し夜は「ウエサカ聖餐の集い」が行われ、今年は第二七回の「ウエサカ」祭である。わが国では四月八日の降誕会で甘茶で灌仏する花まつり、十二月八日は成道会で、特に禪系では厳肅

なる接心会が行われ、二月十五日は涅槃会で、涅槃画像をかかげて「お華だんご」を供えて鳥獸と共に仏涅槃を悲しみ誦経する。

「愛知県ウエサカ祭」では、毎年仏教の教理を青年少年に理解し易い様に、「愛と寛容」とか、「行学一如」とか単的に表現して解説しているが、仲々一般大衆に浸透せず聖日に参加されない。

寺院住職の中にも降誕と成道と涅槃を各個に年中行事として執行しているのに何故に纏めて行うのか、又南方仏教小乗教徒の行事を吾々大乘教徒が行う必要なし、とか論議百出で、「花まつり」やキリスト教の「クリスマス」の様に大衆化及び一般化しないのが残念である。



思うに「ウエサカ祭」は熱帯国の月の夜の祭りであり昼間灼熱の太陽に焼かれて早々夜になり涼しい月の出を渴望する時、遙か椰子の林の上に昇る満月を拜する時、これこそ御仏であり、又慈悲の現われ、又月光菩薩として拜して、釈尊の降誕も成通も涅槃も纏めて釈尊に感謝する聖日に発展したと思われる。

私共日本人は古来正月元旦に「初日の出」を拜すべく、遠い山に登り、又近くの高い丘で「初日の出」を拜し、これこそ「万物育成」の御恵み与え下さるお天とう様、又日光菩薩様、大日如来様と拍手を打ち、頭を深く垂れて太陽崇拜をする国民性である。けれど、容易に「ウエサカ祭」を理解し大衆化しない要因でもあらう。

或る仏教学者の論文を拜すると、文献では、降誕と成道は確実な年月日ではなく只涅槃だけが確実である。何れも三千年の史実で当然であるが、私共は只伝記を信じて各々三大聖日に尊像を拜して深く感泣するのみである。



三大聖日共に釈尊の傍に花と木が配されている。百花燎乱の「ルンビニー」の生誕、菩薩樹下ブッタガヤの金剛座の成道、沙羅双樹の「クシナガラ」の涅槃の床等、総べて花と木がある。

諺に「草木は時を違わず」と云う。私は再度仏蹟を巡拝し、ただ「ルンビニー」のみ花木が少なく、他はそれぞれ伝記通り御在世當時を偲ぶ事が出来た。



私の寺の境内に二本の沙羅の木がある。一本は数年前岡崎市伊賀町昌光律寺御住職より布教の折頂いて植えたので現在五米程成長している。親木は鶴沼の本真寺様より移植の由。他の一本は東京大田区の中山家より一米程の実生の幼木を頂いて移植せし木にて、これは円覚寺の老師が印度より持参せる由にて、何れも円覚寺系統の、「クシナガラ」系統の沙羅の木である。何れも四米程に成長し、一昨年より真白い一房に五粒か七粒をつけて咲き始めた。

或る日、某茶人が来寺して、見事に「白雲木」が咲いていますね、と云われて一般には「白雲木」と称している事を始めて知った。葬儀の際に使う「四華」で白い紙を切って作る、俗に「しかばな」そのままの姿であり、五月初旬より咲き始め五月末日頃に終る。

私は印度仏蹟巡拝は再度共に一月末より二月初旬であり、「クシナガラ」の沙羅の木には花は無く双樹ではなく単樹であった。説明者にその訳を問うと、一本で途中で二本に別れているので、それで双樹であると述べられ

た。私は記念に沙羅の葉二枚を頂いているので、境内の二本の沙羅の木の葉と比べると、稍小型ではあるが、同一系統であり、正にその子孫に間違いない。昨年七月頃その結実した小粒の実二〇粒程を拾い、本年三月土中に蒔いた。折よく出芽して成長したら、法縁の寺院へ贈呈したいと思っている。



昨年、「ウエサカ聖餐の集い」で愛知県仏教会を代表して祝辞を述べた。その要旨は、「私の誕生日は三月三十日で満月でなく、私は七十五歳で积尊成道の三十五歳は既に遠く過ぎ、只积尊涅槃のみが残されたる待望の八十歳であり、残る歳月は五年一日も一刻も無駄に出来ない」と述べたことである。

生者必滅の理は歴然としている。人生必らず終末の日を迎える。生きとし生ける者の厳しい掟である事は云うまでもない。ただ自分だけはまだまだだと、不確実な願望を確実である如く、吾心に納得させて、今日もまたはかない一日一日を送り迎える現実である。积尊の御入滅は涅槃寂静であり、又寂滅為楽である。吾々の死は生者の

終末であり、又生きた者が枯れる状態では釈尊の涅槃又法然上人の臨終の正念往生とは全く遠い距離と心境を痛感する。このままでは普通の死であり、仏門に在る者又仏に奉仕する僧侶として最も重大な真剣な悩みであり、今こそ、終末を如何なる心境で過ごすかを考える土壇場の時であり、真と偽を越えた真剣な時である。



釈尊が八十歳の高齢で旅の疲労と病魔に侵かされ漸くたどり着いた「クシナガラ」の森に入り見渡すと天蓋の如く沙羅の木の花が延びて丁度夜露を防ぐ屋根となり、夜目にも白い沙羅の花が芳香を放っている。この処を涅槃の床と定められ、辺りの草を集め頭北面西に右脇を下に安臥し給う。時に満月は枝と枝の間より光を射し四隣寂然として音無し、最後の御説法を須跋陀羅に出難得道の途を静かに説かれた。私は涅槃の日が満月で真昼の如く明るい夜で、又沙羅の花が咲き芳香を放っていたと思う。

「ウエサカ」が沙羅の花咲く五月で、又満月の夜である事に、仏教徒として深い感動を持つのである。



過ぐる日朝早く知人が来訪され、近くの真宗の寺院住職が昨夜半に逝去された由にて、私も生前に親交あり、草木を愛せられた人柄で早速沙羅の一枝を切り、今夜の通夜に焼香をさして頂くと一枝を託した。通夜に参上すると老いた奥様が沙羅の一枝を非常に喜ばれ枕頭に挿されていた。又寺にて正念往生せられた由。それは誠に倖でしたと、御悔み申上げました。最近知人や有名宗教家の死亡広告を見ると大抵〇〇病院にて療養中に死亡とあり、医学の進歩上全治の見込みなくとも入院され最後臨終の時には肉親その他の者を部屋の外へ、白衣の医師および看護婦に囲まれ酸素吸入や点滴の器具の中で最後臨終を迎えられたと思われる。

来迎仏や最後の静かな「りこ」の音も無き御臨終であったと思われる。臨終行儀も無用となり、ただその人の絶対不変の信仰と日頃確立した心境のみを頼りとせねばならない。

イギリスにて創始せられた「ホスピス」の運動、即ち絶対に全治不可能なる患者を宗教的な環境の施設が必要な

る事を痛感する。



私は閑暇の時に境内を独りで清掃し、二本の沙羅の幹を撫し不思議なる「出会い」を感じつつ遠く印度「クシナガラ」より到来せる沙羅の木は無言ではあるが、釈尊の仏教の真理と涅槃の寂静と必滅の御心境を示し下さる無言の銘木であり、又師であると思い、漸時低声で南無阿弥陀仏と数遍唱名する事している。

一枝を花瓶に入れてくれと家人に頼んでいる。沙羅の一枝を眺めつつ吾が心境を整理し高遠な仏教の教理を愚かな頭で白い「ベツト」の上で復習するが段々と頭腦の働きも低下するであろう。ここで元祖法然上人様御示しの一枚起請文が唯一の頼りとなる。乃至十念も五念も不可能かとも思われるが、必得往生の一念でも二念でも真剣に唱名して往生したいのが、吾が願望である。

今日も沙羅の木の下に立つと小さい蕾が見える。数日にして開花するであろうと思いつつ静かに唱名する。五月は「ウエサカ」祭の月である。

村瀬 秀雄 著

||好評新刷||

『全 訳 法然 勅修御伝』

B 6判 八四七頁 価六八〇〇円

||好評||

『和 訳 浄土三部経』

B 6判 四七四頁 価二五〇〇円

『和 訳 法然 上人 選 択 集』

B 6判 三八七頁 価二五〇〇円

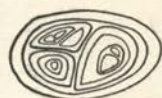
『和 訳 善導 大師 観経四帖疏』

B 6判 五八四頁 価三五〇〇円

『和 訳 善導 大師 六時礼讃』

B 6判 二六五頁 価二四〇〇円

取扱い 法然上人鑽仰会



観音勢至の両菩薩と勢至の応現

なか ばやし しゅう ゆう
中 林 俊 雄

(福井県三国町西光寺住職)

○ 『法然上人行状絵図』四十八巻を『勅修御伝』略して『勅伝』と申していますが、その第一巻のはじめ、序文のところに、「我朝の法然上人、勢至の応現として、もはら称名の要行をひろめ給ふ」(原文のまま)とあり、又第八巻には「上人は勢至の応現たりといふ事、世挙てこれを称す」(原文のまま)とあり、又第三

十五巻には「かの寺(註、香川県生福寺のこと)の本尊、もとは阿弥陀の一尊にておはしましけるを、在国のあひだ、脇士をつくりくはへられけるうち、勢至をば上人みづからつくり給て、法然本地身、大勢至菩薩、為レ度ニ衆生ニ故、顕置此道場、我毎日影向、擁ニ護婦依衆、必引ニ導極楽、若我此願念、不レ令ニ成就一者、永不レ取ニ正覚、とぞかきをかれける」(原文のまま)とあります。

これらの御文によって、法然上人の本地身（本体）は勢至菩薩であつて、勢至菩薩が衆生を救わんがために相^{すがた}、形を変えて、法然上人として、この世におでましになったということが知られます。

法然上人幼名を勢至丸といい、十五歳（勸伝説）の時勉強修行のため入京登山の際、つくり道での摂政忠通公の眼にとまつた勢至丸の光れる眼は、勢至菩薩の智慧の光でなかったか、と私には思われてなりません。

後年智慧第一の法然房といわれたのも、むべなるかなであります。



では勢至菩薩とはどんな方でありましょうか。

浄土宗では本尊として、阿弥陀仏一尊をおまつり致します。その脇士^{わきし}として左に観音菩薩、右に勢至菩薩をおまつりして、中央の阿弥陀仏とあわせて三尊として、おまつりしてもよいことになっています。

この右側の勢至菩薩を、詳しくは大勢至菩薩といい本尊阿弥陀仏の智慧をつかさどるお方であります。

智慧の光が衆生のところへ、大きな勢いで至るとい

う意味であります。

左側の観音菩薩は詳しくは観世音菩薩といい、阿弥陀仏の慈悲をつかさどるお方であります。

世音を聴くのではなく、世音を観る菩薩、世の中の人々の声をきいて、よくその声の出てくる深層、根底を観られるのであります。

この智慧と慈悲とが阿弥陀仏の御性格の全体、お働きの根本で、それを代表せられるのがこのお二方^{ふたはた}であります。

「浄土三部経」の一つ、『仏説観無量寿経』、略して観経と申します中に、阿弥陀仏およびその極楽浄土を観想する十六種の方法を説くところがありますが、その第十が観音観、第十一が勢至観となっています。

このところを拝読しますと、二菩薩とも光明があります。観音さまの方は「華身の光中に五道の衆生の一切の色相、皆中に於て現す」となっています。

即ち観音さまはお身体全体から発しなされるみ光の中には、五道の衆生と申して、地獄、餓鬼、畜生、人間、天上、の生きとし生けるすべての者が、ことごとくみ光の中に現われる、というのであります。

これは何を意味しているのでしょうか。

観音さまは生きとし生ける者を、皆包み、抱きかかえているということであります。

さめて後はじめて抱くと思うなよ

宵よりまもる母の手枕

であります。

母の慈愛にも比すべきものではありません。

でありますから、観音さまの三十三身と申して、いろいろと身を変えてお救いの手をさしのべて下さるのであります。

身を変えてお救い下さるには、やはりすべての者を包み、抱いておられなくては出来ないことです。

勢至さまの方は、「華身の光明は十方国を照し、紫金色をなす、有縁の衆生は皆悉く見たてまつることを得」とあります。

身体全体から放ちなされる光明は十方国を照し、紫金色に輝き、有縁の衆生だけが、このみ光を見たてまつることが出来るといっておられます。

有縁の衆生のみが見ることが出来るということは、

勢至菩薩の智慧の光は、正しいものと正しくないものとを照し出して、正しい方につかしめるのです。正しいものは厳しく叱って、正しい方に向わせます。

正しい教えに帰依する者だけが見ることが出来る光ということでもあります。

父の智慧にも比すべきであります。

この勢至感のところの「華身の光明は十方の国を照し云々」の御文を拝読する時、私はいつも、

月かげのいたらぬ里はなけれども

ながむる人のこころにぞむ

という御歌を思い出します。

法然上人が「光明遍照、十方世界、念仏衆生、攝取不捨」の心をよまれたもので、浄土宗の宗歌となっています。

月は勢至の化現と申します。

月もやはり勢至菩薩の生れがわりであります。月の表面を写した写真をみせつけられ、これが本当の月の

表ての姿であるとわかつてはいても、地上からながめる月の光は美しいわけです。

特に十五夜のお月さまは、格別すばらしいのです。

出た出た月が

円い円いまんまるい

盆のような月が

隠れた雲に

黒い黒いまっくろい

墨のような雲に

また出た月が

円い円いまんまるい

盆のような月が

——小学唱歌——

このようにながめる者だけが、見ることの出来る光であります。

ながむる人の心にぞすむ、であります。

有縁の衆生のみが見奉ることの出来るみ光であります。

そして勢至菩薩は肉髻^けの上に、一つの宝瓶。

たからのかめがあります。肉髻^けというのは頭の頂上に隆起した髻^け（もとどり）のような形をした肉の塊（かたまり）という意味であります。

その宝のかめの中には光明がつまっています。

どんな光明かというと、諸仏の光明で即ち万善万行の光明が入っています。

それを自由自在にかめから出して、慈悲い者にはこの光を、すぐ腹を立てる人にはその光をと、衆生の根機に応じて、光を出して、照しつけ、正しきに導くのが勢至さまであります。

観音菩薩は頭天冠の中に化仏をいただいておられます。この化仏は阿弥陀仏であります。『法華経』の普門品には観音を念ずる者は、火に焼けない、水には溺れない、殺されようとしても、かえって殺そうとする者の刀が折れる、美しい男の子がほしいと観音を念ずれば美しい男の子が生れる、といったことが説かれています。これこそ観音さまのお慈悲の最たるものであります。

しかし衆生よ、お前たち（お前）のそのような願望、

切なる願いにこたえて思うようにしてはやりたいが、よくよく考えてみるがよい、この世の中は娑婆しやば即ち忍土にんどといって、たえしのんで行かねばならない衆苦充滿のところである、と。

可愛想だが思うようにならないのがこの世の中で、永久に本当の安樂というものはないのだ、それで慈悲ひといつて慈の下に悲がついている、と。

観音さまの慈しみの眼には、常に悲しみの涙が光っています。その涙に私達は気づくことであります。気づかねばなりません。

そして観音さまは私達に対してどうだ、一つ眼をさまして、わしの頭上天冠の中の阿弥陀仏におすがりして、念仏相統の日暮しをして西方浄土へ往生したいという思いを起せと、念じておられるのが観音さまでもあります。



このように観音、勢至の両菩薩さま、相より相たすけて、阿弥陀仏の御本願であるお念仏をおすすめになっておりますのであります。又法然上人は勢至菩薩の

応現として、この世におでましになってお念仏を説かれ、ただ一向に念仏すべしと御遺言になり、建暦二年正月二十五日、御年八十歳で極楽にお歸りになられました。今は本地身勢至菩薩として、やさしい中にも厳しさをもって口称のお念仏をすすめておいでになられます。断言します。

段玉裁の説文解字注によりますと、右は口を以て手を助け、左は手を以て手を助く、とあります（右左それぞれ文字の意味）。それで右脇土勢至菩薩は口でもって厳しく正しさを教え、最高最善の念仏を説かれます。

応現である法然上人はお口で念仏を説かれすめられました。師釈空上人のように、手に木枕をもつて振り上げるといふことはされませんでした。手を使わずお口でした。

左脇土観音菩薩は手でもって、衆生をいだきかかえてまもつて下さる。最後臨終の時には手に金蓮台を持って迎えにきて下さいます。

まことに念仏申す者の仕合せであります。

浄土句集

一田牛畝選

年の瀬である。式を挙げねばならん。嗚ぞかし芽出度く忙しいことならん。

紙漉きの手捌き写す冬日和
山形 佐藤 緑石

東京 栗原八重子
節分や年の数豆もてあまし

評 春雨もよく降ったらしい。川の流れも

はげしく、川岸には猫柳が芽出し初めて
暖い春も真近に迫ったらしい。

亡患者布団の中が極楽と
福岡 原 敬二郎

評 年取れば節分の豆も年の数で握りきれ

なくもてあますことならん。然し孫達に
取り巻かれて撒く豆は柔しく倅なこと
だ。

福岡 荒牧 亀齡

勢至像を新たに今日の御忌法会
大分 丹羽 難中

群馬 島津 か寿
福の豆年だけ拾い掌に余る

評 若い時は、一年はなかなか永いよう

であるが、年を取れば、思わぬ内にはや
喜寿にもなっているのである。そして木
の葉髪になってしまっているのである。

御遣訓声高らかに御忌の衆
福岡 権藤みきを

評 前句は年の数だけ豆を撒いたが、この

句は年の数だけ拾うのが掌に余ってこぼ
れているのである。共に微笑しいこと。

長き愛師走を飾る華燭典
東京 真野 竜

石仏の肩よりのぞく椿かな
埼玉 佐藤 泰子

三重 山田 うた
雨あがり流れはげしく猫柳

評 長く愛を続けて心を知り合って幸いと
華燭の典を挙げることになった。しかも

はぐれ風風に飄^{たふ}らるばかりなり
山形 松田 光誓

東京 栗原とも子
送り来る荷を待つ一と日春陣

東京 真野よし子
誘われし伊豆の旅路や春陣

山口 上野 明達
寒風に心経訝す菜師仏

東京 吉原登起子
翡翠かわせきや河原の石に羽やすめ

三重 森 静枝
霧消えて白鳳城の近くあり

山梨 青山富貴江
富士川の春待つ流れ驚舞へる

東京 末常てる子
電線にかゝりし風のきりきりと

東京 田中 秀代
春雪のぼたぼた解くる音しげく

福岡 安藤平次郎
窓の灯や舞ひ続けゐる牡丹雪

山形 松田 允子
受験期となりて母子は黙しがち

東京 小笠原香祥
暮れそめし春灯汽船港町

福岡 行正 一如子
本堂の大屋根こる雪解かな

福岡 服部 光代
とにかくも目出度く迎ふ古稀の春

福岡 深井 鉅士
一度でも参れた彼岸手引きされ

福岡 行正 明弘
早春の障子明るし新居成る

三重 山田 うた
石仏の頬のゆるめり春の風

長野 友洲旋風子
鶴つるの足に光れる春の水

福岡 前田 秀峰
六十三代継がれし法主秋日和

東京 新井 新生
梅咲いて亡き師を偲び淋しかり

福岡 上滝津弥音
衣たもいずれの起居楚々としお初釜

一田 牛畝
葛蒲湯に手合せ僧の沐浴偶

東京 猪瀬 幸子
涅槃図に溜息のごと燭ゆらぐ

東京 細田 初枝
春浅し閉させるままの滝見茶屋

（読）（者）（の）（べ）（ー）（ジ）

藤井実応ご門主の思い出

藤井上人が三河の大樹寺より、大本山増上寺に移られたのは昭和53年のおわり頃であった。54年頃から法主の御法話にあずかる勝縁に恵まれる事が出来た。毎月七日の縁山会、東京共生会の法話会である。法話会は法主藤井上人が知恩院門主として増上寺を去られる昭和57年6月7日まで、かかさず拝聴する事が出来た。

御高齢（八十五歳）の法主は知恩院門主として、古都京に向われたのであるが、殊に御苦

築^{つき}地^じ泰^{たい}賢^{けん}

（東京・中央区在住）

勞の程が拝察される。

昭和54年は、善導大師御遠忌一千三百年の記念すべき年であったが、法主としての御法話も、自然に善導大師の御生涯、法語に関するものが多くなされた。昭和54年6月7日の講題は善導大師の「日没無常偈」であった。

諸衆等聽說「日没無常偈」

人間忽忽營「衆務」 不覺三年命日夜去
如燈風中滅難レ期 忙忙六道無定趣



未^レ得^ニ解脱出^ニ苦海^一 云何安然不^ニ驚懼^一
各聞強健有力時 自策自勵求^ニ常住^一

諸人ともに聴きたまへ

日没無常の偈を説かん

人は営みしげくして

日ごと夜ごとにそのいのち

滅び去るをも覺り得ず

風にゆらるる燈しびの

消えなんとする如くなり

住み難くして六道を

行えもわかずさまよえり

未だ解脱し得ざる身は

あわれ荒海を出でがたし

いかで驚き懼れざる

おのおの聞けよ汝らは

健く力のある時に

自ら策し勵まして

永遠の住家を求めよや

——大木惇夫氏訳

大本山増上寺別時念仏(毎月二十四日夕刻)の

御法話は時に応じてなされた。山崎弁栄上人
についてのものが印象的であった。(増上寺大
殿三階の道場には、山崎弁栄上人筆の経体大涅槃
図が、学友石田義信君の寄進により、全国各地有志
の喜捨によって奉安された。本図は大涅槃經四十卷
十三品、四万字をもつて、弁栄上人が写経図繫せら
れた。縦二六・五センチ、横一八二・八センチの
大作である。浄土宗開宗八百年、大本山増上寺大
殿落慶を記念して奉安された。昭和50年4月19日、
恩師大野法道上人、増上寺八十三世ご法主により
開眼の供養が厳修された。)

三返かえしの念仏。北国の山漁村に行われ
る念仏で、波の音に調子をあわせた念仏、如
何にもものどかな北国山漁村の念仏である。

百万礼拝。山形三寶寺の百万礼拝は如何に
も難行苦行を思わせるものであるが、北国の
素朴な信仰がうかがわれる。

お念仏のお友達を多くもった河野さん。門
主は四、五回にわたって河野さんの事をおほ



めになった。河野氏は学生時代（旧制第一高等学校から東京帝国大学をでられた、前財団法人農林省年金福祉団理事長河野恒雄先生）より念仏せられた方で、本年二月二十八日、NHKより「私の念仏」と題して、御自身の信仰体験を語られた。再放送が三月六日、大変有益なお話であった。毎月一回、河野先生（東京光明会責任者）とは小石川一行院（徳本上人開基の寺）の念仏会で、徳本上人命日の六日にお会いした。徳本上人の人となりについて語り、あるいは藤井門主のことを語った。

河野先生は法主と共に中国長安を尋ねられたが、門主はあの御高齡にもかかわらず善導大師の遺跡の土雁塔にタスキをかけて登られた事などのお話を承った。

藤井門主は学生時代に鎌倉の建長寺の禅会、千葉県松戸市五番の別時念仏に参加。親鸞の名著「教行信証」の閲読、五日間ぶっ通しでお読みになられたという。はるかに若き日の上人の求道の足跡を偲ぶこの頃である。

建長寺の禅会に就いては「仏道を歩む」（昭和57年5月10日、柏樹社よりNHK文化センターでの十回にわたるお話をもとに、加筆、整理、編集されたものが出版された）の中に解説されるものである。建長寺の腹八接心、永平寺の坐禅の御様子を知る事が出来る。大正十一年、ご門主の学生の頃である。特に同書の「宗教生活」の項で感じたのは「拝み合い」ということ。お十念が拝み合いの念仏であること。

昭和三年、私が中学入学のため故郷出発に当って「選択集」の版本を行季の底に収めた。（師入江泰禅が上京にあたって与えたものである。）爾来この「選択集」は、私の住居を変える時、渋谷から長崎へ、再び東京渋谷へ、次は中央区銀座、月島へ、神奈川県へ、最後に現住所の三多摩の調布へと、私の五十余年を見守るようである。書棚に収めているが、シミがついて保存困難のため増上寺に収める事にした。学友大橋英正師が増上寺教務部長として在席の時であった。

◎『浄土』表紙版画販売についての案内

『浄土』誌の遅配が続いており、まことに申し訳ありません。

どうか今後また、『浄土』誌の充実のために、会員諸兄の皆さまの暖かいご支援とご高配を心よりお願い申し上げます。

好評の『浄土』誌表紙版画絵は、大西耕三先生のご好意を得て、豪華額縁に装丁して販売させていただきます。おります。額縁代も含めて、金二五〇〇円というお求めやすいお値段で、季節観に溢れた芸術味豊かな版画掛物が購入できるわけです。どうぞ振替にてご注文願えれば幸いです。

また、大きさの方は、『浄土』表紙絵よりはずっと大きく、約20 cm × 30 cm位の大きさですが、額縁の大きさでいえば30 cm × 50 cm程の大変豪華な一幅となります。

なお限定販売のため、予定数に達しましたら、申し訳ありませんが、おことわりさせていただきます。しかし現在のところ、昨年度の分、正月号から十二月号までの在庫も充分にありますので、ふるってご注文願えれば幸いです。

(申し込み先) 〒102 東京都千代田区飯田橋一―一―六

法然上人鑽仰会 振替(東京) 八―八二―八七

① ② ③ ④ ⑤
 仏 教 行 事 一 年

五月の行事

—— 端午の節句と来迎会

驚 見 定 信
 わし み じょう しん

五月は皐月であり、田植の季節である。苗代で育まれた苗は水田に植えかえられる。稲作の成育過程では最も重要な始りのときであるといえよう。苗が無事に実を結ぶには人間の努力だけではたりない。自然条件の協力が不可欠となる。適度な雨（水）と適度な陽の輝きは稲の結実には欠かせないものである。自然は一定ではない。雨が多かったり、日照りが続いたりすることは多々ある。そのたびに人々はひたすら天気の回復を期待する

のである。しかしなすべがないわけではない。実りをもたらししてくれる（神田の神）に祈りをささげるのである。人々は、稲作が人間の努力にもまして、自然の恵みが重要なことであることをよく承知していた。人間が稲を実らせるのではない。田の神が実りを与えてくれるのだと感じていたといってもよい。天の恵み、地のおくり物が稲であつたのである。こうした人々にとっては田植は、まず田の神をムカエルことからはじめられた。いわ

ば、稲作の人々にとって、五月は水田に神を迎えて豊稔を願うことに中心的な意味があったといってもよい。ここで注意をしておかなくてはならないのは、田の神とは何であったのかということである。祖霊が田の神と同一視されていると、一応考えておいてもよいであろう。五月の行事を、「神迎え」に焦点をあててみていきたい。

〈端午の節句と女の家〉

五月五日は子供の日、とくに男の子の節句となっている。武者人形をかざり、鯉幟をたてて菖蒲湯にはいる。御馳走は粽であり、柏餅である。こうしたかたちがまず一般的である。さらに時代をさかのぼれば競渡（ペーロン）、風揚げ、菖蒲打、印地打、騎射、競馬が行われてきた。いづれも勝敗をきそったゲームであり、いかにも男の節句にふさわしいものであった。これらの行事の起源は概ね中国の端午の行事に由来している。「荆楚歳時記」には五月は悪月であって、とくに午の日は百草をつみ、よもぎの人形を門戸にかけ、蘭湯で洗浴して悪気を払う行事であったという。いわば病氣や災危を払うことが主旨

であった。この行事が官廷に入れられ民間に下降し、とくに武家の台頭によって、菖蒲と尚武の語呂あわせもあって、男子の節句として成長してきたのである。しかし端午の行事が定着するには、より積極的な民俗慣行があったことも忘れてはならない。いまでは男の節句として習俗化しているため見すごしやすいが、断片的であるが残された民俗事象をつづりあわせると、五月五日の別の姿がみえてきそうである。

女の家、女の屋根とよばれる習俗である。軒に菖蒲をさしたり、屋根にふいたりするものである。女性の物忌みの名残りである。早乙女さねめの忌み籠りであったといえはわかりやすいかもしれない。早乙女とは「田植祭に田の神に扮装する乙女、田植えをする女」（新潮国語辞典）である。つまり、田の神を迎えるために乙女が仮屋に籠ったのがまず最初である。ついで仮屋に悪霊を近づけない必要が生じてくる。悪霊払いの呪術的行為が印地打や鐘馗の絵や武者絵となり、ひいては鯉幟にまで変化したのである。五来重によれば、端午の節句以前は早乙女の物忌と悪霊払いが本来の形であったという。それが悪霊払いの側面が強調され、武家の台頭とともにより補強さ

れて男の節句としての性格が強まってきたにすぎないのである。端午の節句の先行習俗は田の神迎えにその主旨があったことがわかる。

〈来迎会〉

端午の節句の起りが田の神迎えであったのに対して、ある行事が生れて民間定着の過程で田の神迎えの意味が附加されてくることもある。その一つが来迎会である。来迎会は五月もしくは四月に行われていることが多い。『民間念仏信仰の研究』によれば二十五菩薩練供養は八件が報告されている。これによれば四月が三件、五月が五件である。この他をみれば八月に行われる九品仏のお面かぶりや、十月に行っていたところもあり、必ずしも一定してるとはいえないが、現今ではほぼ四月ないしは五月といつてよいであろう。本質的には期日はそれぞれの縁起により異なるが、時の経過により四月、五月に集中してきたことには、民俗的な信仰習俗の側の要請によることもあったかもしれない。すくなくも民俗信仰と重なってきたことはいうまでもない。いいかえれば来迎会

をうけとめた人々は、「教学」とは別に新たな民俗信仰の意味をつけ加えてきたのである。

来迎会とは仏や菩薩がこの世にあらわれて信者を浄土（極楽）に引接する、という教えを儀式化したものである。来迎会の起りは恵信僧都源信の二十五三昧会にはじまるとされる。この会員は臨終にあつて念仏を唱え、その功德によって極楽に引接してもらふことにあつた。会員は臨終来迎を願つて、毎月十五日に集まって念仏を唱え、会員相互で助けあうことも約束とされてきた。こうした極楽往生への憧憬は、まず民間にあつては迎講として儀式化された。「今昔物語」十五巻は、丹後の国で迎講をはじめた上人の話を載せている。柴田実によれば、「もしこの『今昔』の記事が信じえられるならば、その迎講は来迎会としてもっとも古い事例に挙げらるべきものかとおもわれる」と述べられている。「今昔物語」の話をかいつまんで紹介してみよう。

極楽往生を願う丹後の国のある上人は、十二月の晦日（つごも）になると一人の童子に「あけ方になつたらこの手紙（消息）をもって私の房の戸をたたきなさい。私は「誰方ですか」とたずねたら「極楽の阿弥陀仏からの使いであ

る」といってこの手紙を渡しなさい」といいつけた。暗の頃童子はいいつけ通りにすると、上人は涙を流して手紙を読み喜んだ。このことは上人の毎年の晦日の行事となった。年が経つうちに上人はきちんとした迎講を行いたいという願いが強まった。信者である大江清定の協力を得て都より、舞人、楽人を呼びよせ、観音、勢至、諸菩薩に擬して迎講がはじめられた。聖人は「涙を流して念じ入りたりと見ゆるほどに、観音、柴金台をさしよせたまひたるに、聖人動かねば、たふとしと思ひ入りたるなめりと見るほどに、聖人氣絶えて失せにけり」とある。往生の願いをとげたのである。

来迎会の基本的なあり方は、この迎講の図式にみるこ
とができる。現在も行われている大和当麻寺の場合を、
柴田実の文章からみてみよう。

「……この行事は一般には練供養（二十五菩薩のお練）と呼
ばれ、毎年五月十四日（旧暦四月十四日）、山内護念院
所管の下に、菩薩講中の人々が観音、勢至以下諸菩薩
（いわゆる二十五菩薩）に扮して、極楽堂（曼荼羅堂）から沙
婆堂まで、およそ一〇米の間に特設された来迎橋と呼
ばれる掛橋（高さ一米・幅一・五米）の上を練り行くのを

山場としたもので、橋の両側、境内を埋めた参拝の善男
善女がそれをみて、さながら自ら往生来迎に与る憶いを
懐き、いよいよその念仏信仰を固めるようにと意図され
た宗教的一大ページェントといふことができよう」と。
また伊藤唯真は、迎講、来迎会の思想的概観は、源信の
「本願に拠る臨終迎接の経説に基づいて、来迎往生とそ
ののための行儀に焦点を置きつつ、「迎接」を説いている」
ことにもとめていられる。

こうした思想、教儀のもとにうまれた迎講、来迎会であ
ったが、行事としてかたちをととのえ、広まってくる
とともに祖先崇拜への関心もとよりこまれてくるようにな
った。

鎌倉時代の終りから南北朝の頃には迎講に亡霊供養の
機能があきらかになってくる。伊藤真徹は、迎講が往生
儀礼から追善礼化する転換点として『述懐鈔』をあげて
いられる。それによれば、「……相伝或ハ親ニヲクレ、
或ハ夫ニヲクレテ諸共ニ歎ケル時、諸精霊夢ノ中ニ告
テ云ク。我ニ逢ント思ハバ、丹後ノ国府ノ迎講ニ往詣ス
ベシ。一切ノ精霊、集会シテ各々利益ニ預ル。……」と
載せている。

すくなくも室町時代は葬祭儀礼が民間に定着するときであったことは知られている。迎講もこうした影響のなかにあったことはいうまでもない。しかし迎講が現世と来世を結ぶ儀式であり、見方をかえれば、死者と生者を結ぶ儀式と考えられてもおかしうはない。むしろ、死者（祖先）と生者とは一体という意識にささえられた日本の祖先崇拜にとってはわかりやすかったであらう。迎講の追善儀礼化にはこうした民俗信仰の側の要素をみることもできるのである。

往生儀礼として生れた迎講、来迎会が時代を追って民俗信仰と結びつき、その儀礼的意味を拡げてきた。現今の迎講において、施餓鬼、流灌頂、塔婆供養が併修されていることに具体的な姿をみることができであろう。さらにいえば当麻寺の来迎会を報告した平祐史の、「当麻寺の会式も実はこの近在の農民の田の神の祭日に当たると見做される」という指摘は示唆的である。当麻寺に限らず、四月、五月に行われている迎講、来迎会にもあてはまるのではないだろうか。わが国の年中行事の中心的要素は祖先祭礼と農耕儀礼にあったことを考えれば納得

がいく。農作業は純粹に技術的なものとは考えていなかった。祖先（霊）の協力が必要であった。そのため祖先（霊）の供養は同時に安定をもたらしものでもあったとみなされる。つづめていえば、祖先（霊）は田の神でもあった。端午の節句が田の神迎えの行事からの変化であったのに対して、五月に行われる迎講、来迎会は亡霊供養がつけ加えられることによって田の神迎えの行事とも重なってきたといえそうである。

『浄土』誌の購読希望者のご紹介を、広くお願い申し上げます。昭和五十六年度より、年会費誌代を三〇〇〇円に値上げいたしました。お見限りになることなく、どうぞ末永く宜しくお願い申し上げます。

法然上人鑽仰会

前進座『法然』劇公演予定日程

◎巡演スケジュール

月日	公演地	会場名
6/2	熊本	熊本市民会館
" 4	鹿児島	鹿児島県文化センター
" 6	福岡	福岡市民会館
" 8	高松	高松市立市民会館
" 9	松山	松山市民会館
" 11	津山	津山文化センター
" 13	倉吉	倉吉福祉会館
" 14	大田	大田市民会館
" 15	出雲	出雲市民会館
" 17	敦賀	敦賀市民文化センター
" 18	福井	福井市文化会館
" 19	金沢	石川厚生年金会館
" 21	富山	富山県民会館
" 27	新潟	新潟県民会館
" 28	長野	長野市立劇場
" 30	長野	長野県民文化会館
7/1	上田	上田市民会館
" 2	同右	同右
" 3	高崎	群馬音楽センター
" 4	同右	同右
" 5	桐生	桐生市産業文化会館
" 7	松本	松本市民会館
" 8	諏訪	諏訪市文化センター

◇◇◇ “浄土句集”欄への投句のお願い

— 及び俳文等の寄稿のお願い ◇◇◇

『浄土』誌本文中のオアシスともいふべき、“浄土句集”欄は、選者であるホトトギス同人一田牛畝先生の献身的な尽力と、あわせて熱心な俳句を愛する会員諸兄に守られて、二ページながら情味と、季節味に富んだ味わい深い俳壇を作っています。心をこめて作句され、熱心にご投句される皆様方へ心から感謝させていただきます。

さて、この“浄土句集”欄へ、どうぞほかの同心の方々もできるだけ多くご投句していただくことをお願いし、また重ねて俳文や句会便り、あるいは俳句にまつわる折々の随想等をご投稿いただくことを、ここに衷心よりお願い申し上げます。

左記要領で、くれぐれも宜しくお願いします。

- 一、内 容 俳文、句会便り等の随想
- 一、枚 数 四百字詰用紙八枚半程度
- 一、締 切 毎月五日

法然上人鑽仰会

念佛ひじり三國志

(百八)

——法然をめぐる人々——

寺内大吉

挿絵 松濤達文画



一

未だそこは桂川の水域であった。もっと正確を期せば、鳥羽離宮を脱してはいないのである。

鳥羽離宮は白河帝紀に構築されはじめたらしいが、規模が余りにも広大で百年近くを経たこの後鳥羽院政期、

なお完成しなかった。完成どころか工事を放棄してしまつたと言える。

離宮の中心に人工池を掘った。南北八町、東西六町という広さだった。そこへ桂川と賀茂川が流れこむ。池辺に諸殿仏堂を構築してゆく構想らしかったが、半分も実現しないうちに中絶を余儀なくされた。

原因は水である。池にたたえられた水が雨ごとに氾濫し、周囲を水びたしにした。いちめんの水郷風景がひろ

がるだけで、そのまま淀の大河へつらなってしまう。

離宮の完成を諦めた後白河から後鳥羽へかけて、せめてもの収拾策として浅い水路へ土盛りをして堤とした。水びたしの湿地帯によりやく水流らしきものと、これを維持する堤道が出来あがったのである。当初の構想からすれば、ここの桂川も鳥羽離宮の内、ということになる。

いまその堤に添った水路を二雙の小舟が静かに下ってゆく。殆んど間隔のない併漕であった。

法然護送の役人兩名は終始素知らぬ顔をしてくれた。

明遍たちは自由に言葉をかかわすことが出来た。

素知らぬ顔をしたのは、必ずしも好意だけからではない。

堤の上には善男善女の群れがひしめいていた。法然の信者たちだ。ただし彼らの視線は水上の小舟へは注がれていない。眼下をゆく二雙の小舟、そこに待ち兼ねているご本尊の法然がよいとは想像してもみない。せいぜい見送りの門人ぐらいと思ったのであろう。みんな堤の上流、新御堂の方を覗きこんでいる。

法然はいつ現れるのか、離京を前にした最後の説法

を、いつ何処でしてくれるのか。

護送の役人がへたに叱声など発したりすると、堤上の眼をこちらへひきつけ兼ねない。護送船と感づかれてしまふだろう。

「もっと早くにお目にかからねばいけなかったのですが……」

明遍の言葉は重かった。

その重量に罪の意識がからまる。

私はあなたをおとし入れようとしてきた。今日この結果と、私の言動は無関係ではない。それは、私のあなたへの嫉妬、競争者意識から発したものだ。

宗教者としては限りなく敬慕していたながら、人間明遍が、わざわざいをこしらえてしまった。

「いや、わたしの方こそ、もっと早くお目にかかりたかった。大原の談義以後、貴僧にはもっといろいろのことを教えて頂かねばならなかったのです」

法然は柔和に微笑んでいる。

その微笑には底知れぬ深味があった。明遍の肌に、思わず粟粒が生ずるような凄く味である。

法然の側には、自分と会わねばならない理由は何一つ

待望の本格／＼仏教／＼歴史巨篇・毎日新聞社から刊行！！

《本誌連載中の大長篇歴史小説》

念仏ひじり三国志

—法然をめぐる人々—

寺内大吉著

現代によみがえる法然の時代——直木賞作家が十年の歳月をかけて遂に完成した法然像——

四六判・上製 全五巻（各巻定価二三〇〇円）

※第一・第二・第三巻好評発売中 第四巻は五月中旬発売予定

お申込みは左記の住所へ（振替の申込で結構です）

毎日新聞社

〒100 東京都千代田区一ツ橋一—一

振替（東京）四—五六五三四

ないはずだからである。ただの受け言葉なのであろうか。

「わたしに会う？　なぜですか」

ややきつい語気になって訊きかえした。

「貴僧はひじりの先達だからです。南都の学匠だった。

それが高野の蓮華谷へ遁世した。花洛へ出京すれば王宮の已講でもあった。それが光堂へこもって市ひじりとなった」

「あなたこそ、ひじりの中のひじりではありませんか」

買いかぶっている、と明遍は腹立たしくさえなる。法然に、ではない。買いかぶられている自分に、である。

「いいですか、明遍どの。真のひじり、出家者とは、弟子とか仲間を持たないものです。持ってはならないのです。それがどうでしょう。わたしは若い日から黒谷の沙弥でいながら、朋友を得ました。門人に恵まれました。出家者としては邪道を歩いたとは思えません」

「正しい仏法をひろめ、その同門同志を獲得することが邪道でしょうか」

「そこまでは間違いいではありません。でもやがてそれに狎れて、仲間たちに頼るようになる。彼らの意向を汲み

すぎて自分を見失ってしまう。これが邪道なのです。とりわけ今度の事件で、彼らを突き放して孤独にさせてやらなければいけなかったのです。あんなひどい目に遇わないでも済んだでしょう。それが……」

専修教団、ことに師法然の身をかばい過ぎて悲運に見舞われたという。安業や住蓮の処刑を語っているのだ。

「しかし、師や仲間を裏切るのは人間として許されないでしょう」

「信心というものを中心に考えたら、師も仲間も問題にはならないであります。師も仲間も所詮は人間です。明遍どの、現在のわたしの心底をお教えしましょうか」

言葉こそあらためたが、口調や表情に力みはまるでない。淡々と語ってゆく。

「どうか、教えて下さい」

「わたしは今、自分が果たして正しい往生が出来るのかどうか疑っているのです」

「何をおっしゃるのですか。称名念仏を重さねてゆけば間違ひなく浄土へ往生出来ると説いて来られたあなたではありませんか。その法然どのに迷われたら、いったい

誰が救われるのですか」

「いいえ、ほかのみんなは救われるでしょう。現に死んでいった安楽や住蓮たち。彼らはみんな最後の瞬間には阿弥陀仏の来迎を見たはずです」

「なぜ……」

「彼らは死へ至るまでに苛酷な体験をしています。拷問されたり、悪罵されたり、女人との問題で濡れ衣を着せられたりしました。こんな悲しい人間を、阿弥陀仏がお救いにならないはずはありません。限りないお慈悲を注がれたことでしょう。その点、この法然はどうでしょうか。阿弥陀仏が慈愛をお向けになりますか」

「あなたほど完全なお人に手を差し伸べないで……」

「完全な人間を、なぜ救わなければいけないのですか。

明遍どの。現在この地上で、最も弥陀の慈愛と縁遠い者は、法然なのです」

「まさか……」

「いいえ、わたしはそれを確信しています。阿弥陀仏と最も遠く隔っているのがこの法然だ。これが現在のわたしの心底でございます。明遍どの、おわかりですか」

「それで……、それで法然どの、どうなさるとい

ですか」

明遍は鋭い視線をこの聖者の面上へ集めた。一語も聞き洩らしてはいけない。表情の小さな変化一つも見落してはならない。

すべてが明遍よ、お前自身の問題だからだ。

二人の息詰まるような会話に、正信房湛空も、また出家したばかりの中納言範光も、全く言葉をさしはさむことが出来なかった。質問はおろか、合槌一つ打てない。息を吞んで聞き入るばかりであった。

二

「明遍どの」

法然は相変らずもの静かに語る。

「はい」

「いまわたしは初めて、心底から阿弥陀仏の慈悲を求めています。求める資格が、ようやく身にそなわったとさえ自覚出来るのです。阿弥陀仏は法然一人だけのために、その限らない愛をこれからはお注ぎ下さるものと信

じられるのです」

「ああ法然どの。それはこれまでも幾たびか折にふれ、時に臨んで求めて来られたのではありませぬか」

「かもしれない。しかし、過去はすべて見失いました。これからです。念仏者法然が、ようやく今、誕生しようとしているのです」

「ああ、法然どの。わたしはなぜ自分が今日、民部卿のお供をして此処へやってきたのか、その理由がやっとわかりました」

「……」

はじめて法然の顔から微笑が消えた。射すくめるように明遍を凝視してきた。

「そういう法然どのに、きっとお会い出来ると信じたからです。これまでににお会いしなかったのも別の法然どのを見てしまつて、誤解したり失望することを恐れたからでしょう」

「明遍どののように孤独のなかに道を求めてきたひじりは、仲間や門弟にかこまれたわたしを見たら、きっと誤解し、失望したことでしょう」

「法然どの。今までのお話。わたしは我が身の問題とし

て聴聞してきました」

「我が身の問題？」

「そうです。あなたはわたしの弱点、道心者として至らないところを心憎いまで抉ぐりました」

「そんなことはありません。わたしは自分のことだけで手一杯でした」

再び法然の表情にふくよかな微笑みがよみがえった。あるいは明遍の言葉に「わが意を得た」のかもしれない。

それにしても七十六歳の老骨の身で流刑に出発する門途、若者のように今こそ新しい法然の誕生だ、と言いきる姿勢に、明遍はもちろん正信房も中納言範光も目をみはらないではおれなかった。

正しい信心とは、永遠の若さが求められるものであらう。

明遍が、

「念仏を申しているとき、心が散漫になったときは、どうしたら良いのでしょうか」

と具体的な問題を質問してきたとき、かたわらの中納言範光が、

「あっ」

と短く叫んで右手の堤を指さした。

そこは桂川が終ろうとして淀の大河へ流入する彎曲部だった。もはや人工の堤は消失し、天然の丘陵が松の根をむいてせせり出していた。念仏の信者たちも姿をかき消した。

丘陵上に五つ六つと人影があった。いずれも騎馬の男たちだ。中納言範光が指さしたのは、この騎馬群であつた。

「あの白馬こそ、まぎれもなく院におわす」

後鳥羽上皇だというのである。

手に手に弓をたずさえていた。眼下をゆく法然を小舟のなかで射殺そうとするのであろうか。

法然はちりり、その丘陵上へ眼をやった。だがすぐに明遍へ戻した。

「散漫になつても意に介することはありませぬ。仏の願力に乗じて……」

もの静かに語り出す法然を、範光がおさえた。

「ああお上人さま。危い。お身体を伏せて下さい」

黒鹿毛の騎乗者が弓をかざし、矢をつがえようとして

いるさまが、明遍の位置からもよく見えた。たしかに此方にねらいを付けている。明遍はあわてて身を伏せた。

だが、低い側壁の板ではろくな「楯」とはなりそうにもなかった。

かがんだ明遍の耳へ法然の冴えた声が流入してきた。

「自分が唱えている念仏が、その声呼び出すのではないのです。阿弥陀仏のほうで慈悲で救ひに来て下さるのです。この事実を、くれぐれも心に留めておいて下さい。だから無心で、おおらかに念仏を唱えていればよい。かりそめにも一心不乱とか、念力を凝集して、などと自力に頼ろうとなさらないで下さい」

法然は言葉も、姿勢も崩してはいなかったのである。

丘陵上の騎馬群のなかで小さな動きがあった。

白馬の後鳥羽院が——中納言範光がそれと指摘した人物が、黒鹿毛の脇へすり寄っていった。弓をかまえた武者はゆっくりとつがえた矢を、えびらへ戻した。やがて弓も左肩へ掛けなおした。法然射殺を思いとどまったようである。

いや、後鳥羽院らしき人物が、思いとどまらせたのである。なぜ思いとどまらせたのであろうか。

法然は何事もなかったように、さらに語り続ける。

「われら人間は誰もが欲念を持っています。目鼻を持つて生まれてきたのと同じです。この欲念——散心をすべて捨て去ってから仏の慈悲を得ようとするのはおかしい。人間でなくなってしまうからです。散心のまま、欲念にまみれたまま念仏し、往生を得てこそ目出たき本願というものではないでしょうか」

明遍は身をおこすと、再び聴聞の姿勢へ戻った。

「明義進行集」は場所を東山の小松殿としているが、ほぼ同じ内容をつたえる。

——念仏ハ申シ候ドモ心ノ散ルヲバ如何シ候ヤト。

上人答テ曰ク。ソレハ源空モ力及ビ候ズト。僧都

又問テ曰ク。サテソレヲ如何シ信ズト。上人答テ

ノタマワク。散レドモ猶、称スレバ仏ノ願力ニ乗

ジテ往生スベシトコソ心得テ候。タダ所詮オオラ

カニ念仏申スガ第一ノ事ニテ候

暗殺団の虎口を脱し丘陵の鼻を曲がった小舟は、淀の大河へ流れ出てきた。すでにゆくてには大ぶりの帆船が

待ち受けていた。遠く瀬戸内や九州へ足を伸ばす囚人船だった。船内には陸路で運ばれた囚人たちが収容されているらしく、舷側の人影の多さが目立っていた。

法然はこの囚人船へ移乗しなければならぬ。二隻の小舟は接近しはじめる。別離が迫っていた。

「法然どの、最後におたずねしたい」

明遍は舟べりへ身を乗り出すようにした。水流が速くなって、ともすると小舟の間隔がひらきがちだった。

「何でしょうか」

「仏像のことです」

「仏像——」

「阿弥陀仏の慈悲を信じるからには、内持仏としてそのお像を持っているべきではないでしょうか」

明遍はわが光堂の、みずから入眼した内持仏「ひかり仏」を思いうかべていた。かつての愛人、高階栄子の面ざしそっくりになってしまった「ひかり仏」だった。

「明遍どの。仏像は仏師が刻んだものです」

「そのとおりです」

「念仏の篤信者なら、自分の心で自分の内持仏を刻むべきではないでしょうか」

「自分の心ですか」

「そうです。ノミで刻んだ仏像ではございません」

「法然どのの内持仏は？」

いよいよ間はひらいてしまった。法然の小舟はもう囚人船へ接触しかかっている。声も途切れ途切れになった。

「ご覧になりたければ勢観房を訪ねなさい。彼が持っています」

明遍たちの小舟は針路を曲げなければならぬ。法然を船上へ引き揚げるべく、太い手を舷側へさしのべた刑吏の怒号が聞こえてくる。これ以上近寄るな、と制止しているのだった。

遠ざかってゆく明遍たちの眼に、囚人船へ這いりこもうとする法然の丸っこい姿が見えた。

三

法然は内持仏を弟子の勢観房源智に預けてある、と言った。源智は小松内府平重盛の孫で、その出生時から法

然と浅からぬ因縁があった。（念仏ひじり三國志）第二章・第二章遺孤を参照）さらに十三歳で出家したあとは、殆んど法然の身辺に随仕した。

当然その内持仏を秘蔵しているものと思った。明遍は花洛へ戻ると、さっそく東山に勢観房を訪ねてみた。

だが、そんな仏像は預かっていないという答えである。さらに吉水の禅室にいたころの法然も内持仏などかざってはいなかった、とも証言した。

いったいあの別離の瞬前に残した法然の言葉は何を意味するのであろうか。

その真意を明遍がさとしたのは法然が入寂した直後らしい。

法然は四国流罪を免ぜられて、建永二年の十二月讃岐の地を離れたが、摂津箕面の勝尾寺へまで戻ってそこに滞在した。なお入洛は許されなかったからである。

ようやく東山吉水へ帰山したのが建暦元年（一二二一）の十一月末だった。流刑で離京してから二年半ぶりである。しかも帰山後二カ月も満たぬ翌正月二十五日には八十歳の生涯を閉じたのである。

明遍が法然の内持仏を知ったのは、その建暦二年の夏

前後だっと思われる。

勢観房源智はその「法然上人伝記」(醍醐本)で触れている。

——上人往生ノ後、明遍僧都之ヲ尋ヌ。一見加ウル

ニ随喜ノ涙ヲ流ス。

何を見て明遍は随喜の涕涙であつたのか。仏像ではなかった。一篇の手記であつた。法然自身の手になつたと伝えられる「三昧発得記」である。

建久九年(一一九八)の正月元日、六十六歳の法然は日課念仏のさなか、「日想」が現前するさまを視認したと書く。二日には「水想」を、さらに「地想」から「宝樹想」と「宝池想」とかさね、またくり返したりして、二月七日までの三十七日間に観無量寿経が説く極樂浄土の「十六想観」のうち五想までを見たのだった。

念仏の功つもり、以後の四年余で殆んどを体得しおわつて、建仁二年(一二〇二)の二月二十一日、阿弥陀仏の真影と触れ合う。

——高島少将殿ト持仏堂ニ於テ之ニ謁ス。其ノ間例ノ如ク念仏ヲ修ス。阿弥陀仏ヲ見ル之後、障子ヨリ仏面ヲ徹通シテ現ル。大キサハ長(たけ)丈六ノ面ノ如シ。即チ忽ニシテ隠レ給ウ

まさしく法然は、誰もが視認し得なかつた阿弥陀如来とめぐり遇つたのである。彼の感覚のなかへ聖像は刻印されてしまつたのである。

だから「心で刻む内持仏」と、あの舟上でいも語つたではないか。仏師が、名声や富のためにノミをふるつた仏像とは本質的に異なるのである。

こうして確固たる内持仏を心底に保有しながら、なおそれを取り巻くおのれの人間的欲念や罪惡をきびしく反省し自戒する法然の姿に明遍は今更のように感動し、随喜の涕涙を禁ずることが出来なかつたのであらう。

法然の諸伝は、囚人船に乗りこんだ法然が船中で大納言律師の公全(あるいは中納言別当の律師弘鑒)と邂逅する逸話を紹介している。公全もまた専修念仏へ帰依した罪科で九州の肥後へ流される身であつたという。

ただし、この律師公全が何者だつたかは不明である。

その後の経緯から正信房湛空らしき像は匂わせている。船中で法然は公全にわが自画像を与える。これを拝して念仏せよ、とも説く。

それは、「わしを拝め」ではないのである。この身は大慈大悲の阿弥陀仏を体感している。法然という個体ではなくて、わが身に泌みついた阿弥陀仏に救いを求めよ、という意味のはずである。

律師公全はこの御影を嵯峨の二尊院へおさめたと伝え
ている。

さて法然の流刑を見送って光堂へ帰った明遍は、わが内持仏の「ひかり仏」をひと目覗いてたちまち嫌悪感がこみ上げた。未だ法然の「三昧発得記」に触れたわけではなかったが、我執我欲の結晶に映じてならないのである。とりわけ入眼した当座は出来ばえを満足していたあの眼がたまらなかった。仏の宏大無辺な徳相とはおよそ縁遠い。物慾しげで、隙あらば欺まそうとする油断のない眼である。しかも外見では哀れみを乞うているのだ。

このいやらしさは必ずしも高階栄子の性根ばかりとも思えなかった。生きた栄子は、彼女なりに邪氣がない。

二人が欲情で結ばれた形においてお互いがお互いを汚く
し合って、いぎたなくなつたのであろう。

木蘭の袈裟を取り出してくると頭からすっぽりとかぶ
せてしまった。ところがこの袈裟が目ざわりになるので
ある。

葬ってしまおう。

四日目の朝、起き出た明遍は突差にそう決断した。

どこへ葬ろうか。

高野山の蓮華谷というところだが、春の海が明遍の脳
裏にひろがった。法然を見送ったあの水景色が忘れられ
なかつたのかもしれない。「ひかり仏」を海中深く沈め
てしまふのだ。

そうだ、海だ。その思いつきがすっかり気に入った。

明遍は「ひかり仏」を袈裟でくるんだまま背負った。

紐で締めつけた。

仕度をしているところへ、珍らしく甥の聖覚法印が単
身はいってきた。

「旅へ出られるのか」

「うむ。海へゆく」

「海……琵琶湖？」

「いや、越前まで足を伸ばしたい」

「ずいぶん遠くまで。それは仏像ですか」

「越前の海へ沈めて来ようと思う」

このあと、明遍は法然見送りの詳細を話した。聖覚は終始感動の眼を輝かしていたが、

「法然ご房の意志は必ず私どもで受け継がなければいけません。専修の人たちが鋭く貫通した細い穴を、われわれの手でひろげるのです」

決意を表明した。

ここで言う専修の人たちとは、安楽や住蓮ら過激念佛者のことであろう。彼らは法然の新思想を武器に制法仏教へ思うさま斬り込んでいったのだ。そして斬り死にした。

聖覚は、制法との兼ね合いにおける柔軟さで、この専修教団を永続化させようというのである。

「もともと法然ご房には、そういうご器量があった」と明遍もこの決意を支持した。

性格からしても法然は、闘う過激者というよりも同入和合してゆく徳者であった。すべてを包容する巨大さがあつた。明遍も聖覚も早くからその点を適確に見抜いて

いた。だからこそ不即不離の関連で彼らは法然教団と接触を保持し続けてきたのである。

また裏返して言えば、法然のこの巨容が体制者側には脅威でもあつた。

このあと聖覚法印は海津の寺へ紹介状をしたためてくれた。その住僧がかつて安居院で学んだ加持僧なのだという。

「もう雪は消えていると思いますが、越前へぬける峠はきついそうです。海津の寺で……」

万端の用意をととのえてゆくことだ、と忠告した。

未だ北国街道の栃ノ木峠が貫通していない時代であつた。琵琶湖西岸の海津から山へ分け入らねばならない。

「七里半越え」と呼ばれる難路である。

「そういう難路を越えていってこそ、北陸の海が貴くなる」

明遍は観音寺の楼門前で聖覚と左右へ別れた。洛北大原への道をたどっていった。

(つづく)

◎読者の皆様へのお願い

弊会会員の年会費は三、〇〇〇円です。月刊誌『浄土』を細々と発行しながら、念仏信仰の増進にと努力しています。新しい読者を広くご紹介下さい。

また、この機会に、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもあります。誌面の数ページをさいて、不定期ながら随時、「読者のコーナー」を設けております。左記要領で、どうぞ振ってご投稿下さい。誌面充実のために、宜しく協力下さいませ。

- 一、内容 自由 (生活の一コマや所感あるいは思うことなどをエッセイ風におまゝとめ下さい。)
- 一、枚数 四百字用紙五枚程度
- 一、締切 毎月五日

法然上人鑽仰会

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円
(送料不要)

浄土 四十九巻 五月号

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和五十八年 四月二十五日 印刷
昭和五十八年 五月 一日 発行

編集人 宮 林 昭 彦
発行人 佐 藤 密 雄
印刷人 関 二三男
印刷所 長谷川印刷株式会社

東京都千代田区飯田橋一―十一―六
発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番
〒二二三 振替東京八一八二一八七番

<『浄土』誌連載中の大長篇歴史小説>

待望の本格／＼仏教／＼歴史巨篇！

毎日新聞社から好評のうちに発売中！！

念佛ひじり三国志

—法然をめぐる人々—

寺内大吉 著

四六判・上製 全五巻（各巻定価一三〇〇円 千各二五〇円）

直木賞作家が10年の歳月をかけて遂に完成

香り高い歴史ロマンの超大作

—第一・第二・第三巻発売中—

毎日新聞社

〒100 東京都千代田区一ツ橋一ノ一
振替（東京）四一五六五三四